

子規篇

映画文学人生論

0411) 墨汁一滴	正岡子規	草枕	夏目漱石
0421) 俳諧師	高浜虚子	野分	夏目漱石
0431) 野菊の墓	伊藤左千夫	夢十夜	夏目漱石
0441) 土	長塚節	坑夫	夏目漱石
0451) 三太郎の日記	阿部次郎	門	夏目漱石

『七草集』には当座の間に合わせに漱石と
なんしたり顔に認（したた）め侍り

夏目金之助が漱石という雅号を使いはじめたのは明治二十二年。「『七草集』にはさすがの某も実名を曝すは恐レビデガスと少し通がりて当座の間に合わせに漱石となんしたり顔に認（したた）め侍り」。 (五月二十二日付子規宛書簡)。

その雅号は子規が自分で使うつもりでいたというが、いずれにしても、子規あつての漱石、漱石あつての子規だ。二人の才能の衝突・交流が日本文学を豊かなものにしたことはまちがいない。

明治二十八年四月、漱石は東京から伊予松山の旧制松山中学に赴任した。子規の故郷という事実も赴任の動機にあつたのではなからうか。『坊っちゃん』は江戸っ子の漱石が松山中学に赴任しなければ誕生しない。しかし、十一月六日付の子規宛の手紙によれば、「この頃愛媛県には少々愛想が尽き申候。貴君の生れ故郷ながら余り人気（じんき）のよき処では御座なく候」とある。

翌年、熊本の第五高等学校に転任したが、こんどは「教師は近頃厭になりをり候」と明治三十年四月二十三日付の手紙で子規に訴えている。希望をいえば、「教師をやめて単に文学的の生活を送りたきなり。換言すれば文学三昧（ざんまい）にて消光したきなり」という。

この当時、漱石は子規に手紙で俳句の指導を仰いでいる。「俳句は文学の一部なり」と子規は考



子規篇

映画文学人生論

えていた（『俳諧大要』）。当時の漱石の意識では俳句をつくることも「文学三昧にて消光」にくまれていたと思う。

俳句革新をめざす雑誌「ホトトギス」の創刊は翌明治三十年。子規の没後、「ホトトギス」を主幹した高浜虚子も伊予松山の出身で、子規を通じて当時から漱石と交流があった。

滑稽趣味を發揮し得る漱石の才能について子規はすでに明治三十四年に『墨汁一滴』で高く評価している。「ホトトギス」に『吾輩は猫である』の連載がはじまったのはその四年後だ。

当時の「ホトトギス」は俳句だけでなく、子規の提唱する写生文も掲載する総合文芸誌だった。主な掲載作品は、夏目漱石の『吾輩は猫である』『坊っちゃん』、高浜虚子『風流懺法』、坂本四方太『夢の如し』、伊藤左千夫『野菊の墓』、長塚節『佐渡ヶ島』、寺田寅彦『団栗』、野上彌生子『縁』、鈴木三重吉『千鳥』、森田草平『御殿女中』、阿部次郎『狐火』など。

子規は俳句だけでなく短歌の指導者であり、漱石の文学的才能の発見者だった。「ホトトギス」によって文壇に登場した作家は高浜虚子、坂本四方太らの俳人、伊藤左千夫、長塚節らの歌人、それに、漱石の門弟たちである。

子規の逝去は漱石が留学中の明治二十五年。

筒袖や秋の棺にしたがはず

漱石

手向くべき線香もなくて暮の秋

漱石